

君があらゆるものを恐れているなら  
この本を読みたまえ

G・バタイユ

二〇三〇年、五月十日、十二時半。

鎌倉小町通りの喫茶店「帰路」で、鎌倉署の山風健一署長は、鵜沼に探偵事務所を構える郷田狂介からのメールをあらためて見ている。

[自殺請負所＋未来計画カンパニー＝姥捨山／タナカ＋美々＝失踪／姥捨山＋失踪＝死んだる団]

マスターの立原正男がそっと声をかける。

「署長、相変わらずひと足早いですね」

「早とちりとか勇み足とか、云いたいんだろう」

「とんでもありません、そんな失礼なこと。

それが署長のポリシー、ちゃんと解っていますよ」

鵜沼の探偵事務所から郷田狂介が、鎌倉の未来コスモス院から小林金助が、やってくる時刻が近づいている。

山風はコーヒーのお代りを頼んで、明るい窓外を視た。

天気がよいせいだろう、まだ一時前なのにやってきた。

郷田が金助の車椅子を押しながらやってきた。

山風は入口まで出迎えた。

「仲良くご一緒にようこそ」

「さっきたまたま、郷田探偵に会ったので、失礼でやんすが、使えるものは猫でも使えと」

金助が笑いながら云うと、郷田も笑いながら、

「猫でよかったわ、熊なんて云われたら最低」

「とにかくお互い、目の黒いうちに話を煮詰めようではありませんか」

山風は、荒野大三郎に関わって死んだ祖父、死にそうになった父のことを想いな

がら云った。

郷田も金助も頷いて、席に坐った。

十日、午後三時。

山風健一、郷田狂介、小林金助の三名は、「帰路」で会談を続けている。

話は煮詰まってきた。

「タナカ君とやりに、GPSと盗聴器を取り付けたらどうかね。

ごぞんじのように違法だが、ロボットに関してはまだ法律が出来てはいない。

それでも何か問題が起きたら、私が責任をとればいい」

山風が提案しつつポケットから実物を示すと、金助はしきりに頷き、

「タナカ君にかぎらず派遣ロボットはみんな、六時過ぎに未来計画カンパニーに帰って行きやんす。

行き先は解っているわけだが、それでもあそこほどのフロアに何があるか謎で怪しい。

あの竜宮城みてえな建物だもの、なかは迷路みてえになっているはずさな」

「その迷路の先の片隅に、美々ちゃんが監禁されていても不思議じゃないわね」

郷田は云いながら、美々の生意気な口調に不似合いの、清楚な面影を思い出していた。

「ただあちきは、タナカ君に魂胆も悪気もないと考えてやんす。

自分の担当だからって身最賃なわけではなく、本当に彼は、いや彼女は介護人としても完璧でね。

何かの問題でタナカ君が担当をはずれることでもあったら、あちきはまいっちないやすなあ」

金助は室内に響き渡る声を出した。

それを抑えるためもあって、郷田は声を落とし、

「よく知ってるわけではないけど、あたしもそう思っているわ。

でもなんにしたって、荒野の子分であることはまちがいないわけで」

そこに山風が口を挟む。

「そこなんだよね、そこが私にはよく解らない。

荒野は介護ロボット派遣会社という、いわば社会に役立つ立派な仕事をしているわけで。

私が調べたかぎりでは、派遣料金もリーズナブルで、またロボットたちをととても大切に扱っていてブラック企業でもなし、みんなに慕われている。

これはいったいどういうことなんだろうと」

すると金助がまた声を張り上げる。

「それこそが荒野のやり口でさあ。

荒野の腹心の、川上宙衛門も木下弁太郎も、むろん死んだる団の連中も、めっぼ

う荒野に心酔していたっけ。

あのかぎりない優しさというやつが曲者で、おそらくそれが荒野の気質なんだろうけど、本人がいちばん解っていまっせ。

あの独特のカリスマ性は、荒野の優しさと無縁であるはずがねえ。

けれどもあちきは、かぎりない優しさというやつに疑問を持っておりやす。

それは何か残忍な気質と表裏をなしているのではないかとね。

それはまあ、正直云って麻暮先生のことでもありますかね」

「つまり金助さんは、荒野と麻暮さんとが似ていると」

郷田は思わず声を放った。

「へい、それが口惜しいことに、瓜二つとは言えないまでも葉っぱの裏表」

金助は苦虫を噛み潰した表情で答えた。

十日、午後六時。

小林金助は未来コスモス院に戻っている。

揚げ立てのトンカツとあったかいご飯と味噌汁の、夜食を済ませたばかりである。

タナカが後片付けのために入って来た。

「旨かったよ、タナカ君」

「ソレハ、ヨカッタデスネ。

デモイツモ、オイシイハズデス。

タブン小林サンノ、体調ガヨカッタノデショウ。

オメデトウゴザイマス」

「何が目出たい」

「食事ガオイシイノガ、一番デス。

ソレハ、イキテル証デスカラ、オ正月ヨリ、オメデタイ」

「とにかくありがとう、いや目出たい、目出たい。

お礼にハグしてあげるぜ」

と云いつつ、金助はタナカを抱きしめ、臀部の割れ目のところに、超ミニのGPSと盗聴器を貼付けた。

「小林サン、ハズカシイ、キモイ。

モウハナシテクダサイ」

「感謝の印じゃのに、キモイとはなんじゃ。

キモイなんか、二十年前の言葉で、いまはイモキと云うんでっせ」

「小林サンハ、何デモクワシイデスネ」

「いんや、お宅の社長には負けるよ。

あの人、天才じゃからな」

荒野が聞いていることを念頭に置いて云ったのだが、我ながらわざとらしくったかもしれない、ちいと勇み足だったかな、と金助は思ったが、とりあえず役目は

終わった。

あとは山風署長におまかせするしかねえな。

十日、午後八時。

鎌倉署の署長室で、山風健一は、盗聴器の受信機から響いて来る声に耳を傾けている。

コンピュータの画面で、タナカが未来計画カンパニーの十階に三十分ほどいて、それから十三階に移動したことが確認されている。

「私ハ何モ、シマセン。

長年ニワタリ、日々ヒリダシタ我々ノ糞ガ、海ニナガレ、大平洋ノ中心デ、巨大ナ塊トナッテ、ワダカマッテイマス。

ソレガイヨイヨ、ウゴクノデス、民族大移動サナガラ。

回転シ曲折シナガラ、マズ房総半島ノ尖端ヲ掘鑿、ソレカラ三浦半島ノ尖端ヲ破壊シ、防波堤ノ強固ナ東京湾ヲ右ニミテ、湘南ノ海岸カラオシヨセル。

上陸ハ、七里ヶ浜ナノカ、稲村ヶ崎ナノカ、葉山ナノカ、片瀬江ノ島ナノカ、郷田君ノ地元ノ鵜沼ナノカ、ソレハワカラナイ。

ワカッテイルノハ、ソノ巨大ナ塊ガ、鎌倉、横浜ヲ壊滅サセ、回転シ曲折シツツ、東京メガケテ突進スルトイウコトナノデス」

ああ、これが荒野大三郎の声か、と山風は武者震いを抑え切れなかった。

まさしく地獄の底から響いてくる声音。

厳粛で、低音で、自信に満ち、謎めいた声音。

まちがいなく荒野は、盗聴器が仕掛けられていることに、あらかじめ気づいていて、我々に向かって話しているのだ。

しかし、巨大な塊とは何だろう。

津波の予言でもしているのか。

自動録音された荒野の声を、郷田狂介にも小林金助にも聞いてもらいたい。

山風は、ふたりに明日、鎌倉署まで来てほしいとメールを入れた。

すぐに両名からOKの返信が来た。

十一日、午前十時。

山風健一、郷田狂介、小林金助の三名は、鎌倉署の署長室にいる。

そして、荒野の声を聞いている。

終わってから、金助が声をあげた。

「やばい、これはやばいぜ。

これは津波の予言なんかじゃありやせん。

もしかすると、海底に何か物騒なものをこしらえているかも。

なにせあんな竜宮城を作るやつでっせ。

あちきは、荒野は、未来コスモス院を壊滅させる魂胆かと考えていたが、そんなちっぽけなことじゃあなかったんだ」

続けて郷田が頷きながら、

「あたしも、これはやばいと思うわ。

GPSで、タナカ君が十階に三十分いたでしょう。

そのとき、盗聴器に何も声が入っていなかったわねえ。

それが変なのは、たとえばそこが介護ロボットたちの宿舎なら、それなりにうるさいはずよね。

タナカ君がトイレやお風呂に入るはずはないから、きっとそこに美々ちゃんがいるのよ。

猿ぐつわされているか、麻酔を射たれているか。

タナカ君はタナカ君なりに心配して、美々ちゃんの様子を窺っていたんじゃないかしら」

「しかし、その巨大な塊と、美々ちゃんの誘拐との、関連性が見つからん」

と、山風が腕を組むと、郷田は天井を仰ぎ、

「ああ、あたしとしたことが、いままでうっかりしていたわ。

さっきの署長の、誘拐という言葉で気づいたのよ。

美々ちゃんの父上は、海上保安庁のトップだったわ。

海底の、あるいは海上の、荒野の作戦を見逃させるためのものかも。

いずれにしても、想定できる荒野の作戦は、東京壊滅、壊滅した首都を牛耳って、全国に号令をかける。

その後は、その後は、あたしなんかには想像もできないことよ」

山風は大きな溜息をつき、

「はてさて、我々は、今後どんな手を打つか。

いままでの情報だけでは、捜査令状はとれないし」

郷田と金助はしばし黙っていたが、郷田が妙な提案をしてくる。

「こうなったら、忍者が必要ね。

むかしはきっと、小林さんが忍者の役目だったんでしょうが。

できるだけ早く、新しい忍者を探さないとね。

とにかく未来計画カンパニーを探して、その全貌を白日の下にさらすのよ」

金助は苦笑し、

「いやあ、あちきなんか、忍者というよりも、ほとんど泥棒ってやつでさ。

でもさ、最近の建物は、セキュリティが半端じゃねえもんな。

そんなもの屁とも思わない忍者が

忍者と云えば、麻暮のだんなは、忍者そのものでしたぜ。

ああ、だんなが生きていたらなあ」

つと郷田が手を打ち鳴らした。

「ああ、あたしとしたことが、いままでうっかりしていたわ。  
小林さんのお話だと、荒野と麻暮さんは葉っぱの裏表。  
葉っぱの裏が活着ているのに、葉っぱの表が死んでいるわけないじゃありませんか」

金助は愁眉をひらき、  
「まさか、まさか、それでも、まさかよ起これ」

十一日、正午。

山風健一、郷田狂介、小林金助の三名は、鎌倉小町通りの喫茶店「帰路」にいる。一緒にランチをとろうと、鎌倉署からこちらに移ったのだった。出かけていた立原正男が帰って来た。  
「おいしいランチ作りますから、十分だけ待ってください」  
「十分で作るランチなんて、期待できないなあ」  
山風が、冗談で憎まれ口をたたいた。  
「云い間違えたんですよ、充分待ってください」  
「それなら了解」  
「ではご期待ください」  
立原は、厨房に行ったと思ったら、すぐに戻って来た。  
「あれ、もうできたのかい」  
山風がまた冗談を云うと、立原は真顔で、  
「いまそこのショッピングセンターで、顔見知りのおかみさんから妙な話を聞いたんです」  
「その話が先か、ランチが先か」  
山風がまた冗談を云うと、立原はより真顔になって、  
「小林さんの気持を察すると、話が先でしょうね。  
なぜって、おかみさんの話というのは、無気味な鉄仮面を目撃したって話なんですから」  
「ててて、鉄仮面」  
金助は前にのめって、あやうく車椅子から落ちそうになった。  
立原は続けた。  
「そのおかみさんは、稲村ヶ崎の海岸沿いに住んでいるんですがね。  
昨日の夕方、浜辺に飼犬を連れて散歩に出たら、浜辺に近い海の中から、鈍く鋭く光るものが現れたと云うのです。  
その光り具合で、おかみさんはそれを剣だと思ったんですね、ええ、新田義貞が名剣を投じて、干潟に乗じて鎌倉へ攻め入ったという故事がありますからねえ。  
けれどもだんだん近づいてくると、それは剣ではなくて、無気味に光る鉄仮面だったそうです」

「そそそ、それは鉄仮面だけだったのかい、そそそ、それとも」  
金助が突っ込むと、立原は金助に向かって、  
「いえ、鉄仮面の下に、鎧を着けた胴体が」  
「どどど」  
「ただ、おかみさんが叫び声をあげたものですから、鉄仮面はまた海に沈んで行ったそうです」  
「ままま、麻暮先生なあ」  
叫んだ金助の両眼から、大粒の涙が吹き出した。

十一日、午後一時半。

山風健一、郷田狂介、小林金助の三名は、鎌倉小町通りの喫茶店「帰路」にいる。立原正男が作った、自称スペシャル・ランチを食べ終えたばかり。  
「こんな美味しいランチは久しぶりだわ。  
問題が解決したら、もっと美味しかったでしょうね」  
郷田がしみじみとした調子で云うと、山風が口を開く。  
「私もこのランチは美味しかった。  
しかもこのランチを食べながら、ある男を思い出していたよ。  
なぜなら彼は、こういう美味しいものは食べない。  
大昔の忍者食といったものしか食べないんだ」  
「彼は忍者なの」  
郷田が聞いた。  
「いや泥棒だ。  
しかも現代の、いわばIT泥棒だから、どんなセキュリティでもへいちゃらで侵入できる」  
「その男に頼んだらどうよ」  
さりげなく郷田が聞いた。  
「それがいま監獄にいて、なにせ首相官邸にも潜入しているから、やっかいな重罪も着せられて、刑期は二十年、出所は三年後かな」  
「三年は待てないわよ、何とかならないの」  
きつい調子で郷田が聞いた。  
「何ともならんが、何とかしてみるかな」  
「どうすんのさ」  
またきつい調子で郷田が聞いた。  
ほとんど、せつついているのだった。  
「脱獄させるのさ」  
「まっ、署長がそんなこと云っていいのかしら」  
啞然として、郷田が聞いた。

しかし郷田の眼は、山風の案に驚愕しつつも感心していた。  
「むろん、我々の要求を飲むという確約を得たらだが。  
さっそくだが小林さん、彼に云い含めてくれませんかね」  
山風は金助に向って云った。  
「やれと云われればなんでもやるが、あちきでいいのかい」  
金助はいささか戸惑いの様子。  
「小林さんだからいいんです。  
署長や探偵が面会だとなると、怪しまれます。  
巢鴨刑務所は管理も厳しいですからね。  
ただ念のため、郷田さんは介護人を装ってご一緒に」  
「それはいいアイデアねえ、署長、冴えてるわあ」  
自分も参加できそうなので、郷田は喜色満面である。  
「それでは段取りを相談しましょう。  
そうそう、彼は金之助と云います、竹田金之助」  
「ももも、もしかして、そいつは、鼠」  
金助がうろたえた声を出したが、山風は平然と、  
「そう、泥棒のくせに、ひところ世間にやたらと人気のあった、週刊誌いわく、  
〈現代の鼠小僧〉」  
「げっ」  
と云ったなり、金助は蒼白となった。  
山風と郷田が、金助の顔を見つめた。  
金助はしばし、言葉を失い、固まった。  
ようやくコーヒーカップを掴んだが、その手は小刻みに震えていた。  
「もしかして知ってる人なの」  
遠慮がちに郷田が聞くと、金助はやや顔を紅潮させ、  
「実はあちきの息子なのさ。  
尤も籍にも入れてあげられなかったし、親父らしいことは何一つ、してあげられ  
なかったんだけどさあ。  
弁解じゃないが、何しろあちきは、麻暮のだんなが総てだったですから、女子供  
はほったらかしでさあ。  
会えなくなって半世紀でやんすが、その間、息子が現代の鼠小僧だなんて云われ  
ていることを、何度か風の噂で聞いたことはありました。  
名前だけはあちきが付けたんでやんすが、もちろん竹田というのは、母親の方の  
姓でね」  
「それはそれは、久しぶりの親子対面ってわけね」  
郷田がしみじみと云った。  
山風は感無量といった声で、  
「それにしても血はあらそえませんなあ。  
聞くとところによると、竹田金之助はそろそろ六十になるはずだが、その運動能力



は二十歳のときと全く変わっていないとのこと。  
この男はまちがいなく我々の戦力になりますな」

十二日、午後一時。

郷田狂介は、鵜沼の事務所で、昼食をとっている。  
珍しく出前を頼んで、ウナ丼とカツ丼を代わる代わる頬張っている。

ウナ、カツ。

つまり、素早く勝つ。

しかしさすがに胃が苦しくなってきたときに、山風健一署長から電話が入った。

「あたし、お昼ごはん、署長はお昼ごはん抜きなのね」

呑気な声で出たが、山風の声は呑気とはほど遠い。

「それどころじゃないから、電話したんだ。

例の竹田金之助だけど、模範囚により仮釈放だとさ」

「まあ、それは好都合じゃないの。

もう、ウナ丼とカツ丼の効果が出たわ」

「なに、昼間っから、そんなに食っとるの。

明日朝一だけど、体重増加で行けないんじゃないの」

「行きます、行きます、お昼ごはんはストップ。

巢鴨刑務所ね、小林さんと一緒に行くわ」

「大丈夫かね、親子対面。

竹田金之助が気を悪くしたら、この計画はオジャンだよ」

「もう還暦なんですよ、酸いも甘いも噛み分ける年頃よ」

「とにかくまかせたよ」

山風が電話を切ると、郷田はすぐに金助にメールを入れた。

[昨日はお疲れ様／明日朝一に竹田金之助さんが仮釈放されます／八時に未来コスモス院まで迎えに行きますのでよろしく]

金助からすぐに返信があった。

[了解しました／なにか贈り物をしたいが何がいいでしょうかね]

郷田はしばらく思案してからメールをした。

[子供の頃の息子さんの好物を覚えていますか／監獄では好物なんか食べられませんからね]

金助のメールも時間がかかった。

[恥ずかしながらようやく思い出しました／大根ですよ／生の大根を齧るのが大好きでした]

[それならあたしが用意します／新鮮な無農薬野菜を売る八百屋を知っていますから]

そうメールを送った郷田は、  
「ご飯を残して、よく親父に叱られたっけ」  
と独り言を云ったあとで、残ったウナ丼とカツ丼をたいらげた。

十三日、午前十時。

五月晴れのもと、郷田狂介と小林金助は、巢鴨刑務所の表玄関で待っている。  
車椅子の金助の手には、白く瑞々しく綺麗な、美少女の脚に似た、一本の大根が握られている。

ふたりは三十分前から待っている。

「そろそろですかね」

と金助が云い。

「そろそろよ」

と郷田が云うと、扉が開かれ、通称現代の鼠小僧、竹田金之助が出て来た。

粗末な上下、手に風呂敷を持っている。

係官に丁重にお辞儀をしてから、こちらに歩いて来た。

郷田は緊張したが、金助が大根を差し出すと、金之助は微笑みながら受け取り、すぐにそれを齧った。

それからまた金助に向って微笑むと、

「旨い」

とひとこと云った。

それが親子対面の総てであった。

それ以上でもそれ以下でもなかった。

金之助は郷田に一礼すると、郷田に代わって金助の車椅子を押した。

十三日、午後一時。

竹田金之助は、鵜沼の郷田探偵事務所にいる。

道々あるいは電車の中で、囁き声の郷田から依頼を受けた。

事務所についたときには、すっかり大根をたいらげていたが、郷田の作った梅茶漬けを三杯食べた。

郷田はさりげない口調で、こう云ってくれた。

「お腹がいっぱいになったら、お風呂にどうぞ。

出たらこれに着替えてね。

そうそう、二階に一部屋空いているから、しばらくここに住むといいわ」

金之助はその生涯に於いて、すくなくとも刑務所では、絶対に一度もしなかったことをした。

つまり、目を潤ませたのだ。

金之助は、懐かしい父親に会わせてくれたばかりか、こんな自分に衣食住を与えてくれた、郷田の云うことなら何でも聞こうと決意した。

涙目をごまかそうと、金之助がガラス窓から外を視ると、鵜沼海岸が光っていた。

潮騒の音が微かに聴こえ、海鳥の声も幽かに聴こえた気がした。

これが娑婆の光だ、これが娑婆の音だ、と金之助は体感し、しばらく見とれ、聴きほれていた。

十四日、正午。

喫茶店「帰路」で山風健一署長は、郷田狂介からのメールをあらためて見ている。

[竹田金之助さんのダチからそろそろ七つ道具が届きます／今晚から行動開始するそうです／自信はあるそうですから報告が期待できます／山風さん・小林さんへ／郷田より]

「署長あいかわらず入れ込んでいますね。

寝てないんでしょう、あいかわらず眼に隈ができていますよ」

マスターの立原正男があいかわらずの声をかけた。

「そんなことはないさ、活動してくれるのは金之助さんだ。

私はさ、待たせるより待つほうが辛くない性分なんだ」

「そうでしょうが、あまり待たなくても大丈夫ですよ。

ほら、向うから郷田さんが小林さんの車椅子を押してやってきます」

立原の言葉が終わらぬうちに、山風は出迎えるために入口に行った。

「おーい、またそこらで会ったのかい」

山風が遠く声をかけると、向うで郷田が笑顔で応えた。

「いえいえ、ちょいとタナカ君と話をしたかったので、あたしは未来コスモス院まで行ったのよ」

郷田はタナカに、榊美々が行方不明になっていることを告げたのだった。

そうして、タナカの表情を窺ったが、基本的にロボットには表情はない。

そこで、もしかすると誘拐されたのかもしれない、と荒野までは聞こえそうにない小声で云った。

すると、タナカは明らかに軀を小刻みに震わせながら、

「ワタシヲ、ウタガッテイマスカ。

ワタシハ、カンケイアリマセン」

と云ったのだった。

郷田は長い探偵稼業の経験上、関係がないと云う者は、必ず関係があるということを知っていた。

いつものテーブルいつもの場所にめいめいが坐ると、コーヒーを注文する前に、立原がコーヒーを持って来た。

立原は三人を代わる代わる見ながら、

「例の稲村ヶ崎のおかみさんにまた会ったので、詳しいことを聞いたんですがね、その鉄仮面は独り言みたいに笑っていたそうです。

ええ、精神に障害のある人が笑うみたいに」

金助はすぐさま、

「こういう笑い方ではなかったかなあ。

ケケケ、ケッケ」

「そうそう、おかみさんは、河童みたいな笑い声だと云っていましたから、そういうことでしょう。

それと鉄仮面の姿は、映画の『スターウォーズ』のダースベイダーに似ているとも」

「まちがいねえ、麻暮のだんなだ。

山風さん、郷田さん、いざとなったら、金之助を麻暮のだんなに付けやしょう。

むかしあちきが麻暮のだんなに付いていたように」

金助の提案に、

「そうね、それこそ鬼に金棒ってやつねえ。

でもね、決して足手纏いにはならないから、あたしも参加させてほしいの。

美々ちゃんを救い出すのは、あたしの仕事だから」

山風は立場上、金助は身体上、活動できない。

素直に頼んますと云った。

十四日、午後四時。

山風健一、郷田狂介、小林金助の三名は、喫茶店「帰路」にまだいる。

竹田金之助から郷田に電話が入り、

「今晚決行します」

とのことだった。

山風は立原正男に缶ビールを買ってきてもらい、四人で飲んだ。

山風は大声で、  
「前祝いだ」  
と云ったが、荒野の恐ろしさを一人だけ知っている金助は、前祝いにしても早すぎると思った。  
それに息子の安全が心配だった。  
くわえて、稲村ヶ崎のおかみさんが見たという、鉄仮面が気になって仕方なかった。  
また、できれば荒野を油断させるために、タナカとバカ話でもしたかった。  
息子に協力できるとしたら、それくらいしかない。  
金助は、みんなの顔を眺めながら、  
「そろそろお開きにしやせんか。  
どちらにしたって我々は金之助の報告を待つしかありませんからね」  
「あたしは夜中までここで飲ましてもらうわ」  
と郷田は云って、  
「このまま事務所に戻って、敵地に赴く金之助さんを見送りするのは辛いもの」  
と、探偵らしからぬセリフを付け加えた。  
「それなら僕が小林さんを、未来コスモス院まで送り届けさせてもらいます。  
お店は今日はお休みしますから、署長も飲みましょう。  
帰りに郷田さんのためにワインを、署長のためにウイスキーを買ってきますから」  
と立原が云った。  
「よし、それならばここで成功を祈るとするか」  
山風は云いながら窓外を視た。  
風が強くなって、雨が降る気配もある。  
「雨天決行かね」  
と郷田に聞くと、  
「金之助さんは、雨でも降ってくれば好都合なんだが、と云っていたわ」  
「そうかな、泥棒の天才には雨も味方するか。  
それにしても現代の鼠小僧に、警察や探偵の片棒を担いでもらうとは思わなかったな」  
「なにそれ、署長のアイデアでしょうよ。  
片棒担ぎどころか、急先鋒なんですからね。  
金之助さんに万一のことがあったら、署長の責任ですからね」  
ふたりのやりとりに、金助はいたたまれず、  
「それではあちきはこれにて。  
金之助は目的を果たしてくれると確信しておりやす。  
何か報告ありましたら、メールをよろしく」  
と云い残して、立原に押されて帰って行った。

十四日、午後十時。

山風健一と郷田狂介は、まだ喫茶店「帰路」にまだいる。

立原正男は酔いつぶれてしまったが、ふたりはまだ飲んでいる。

立原が買ってきたアルコールはすべて飲みつくし、郷田がコンビニに行って、焼酎とおつまみを買ってきた。

「車で来たんだろう、酔っ払い運転は駄目だよ」

うつろな眼の山風が云うと、

「車もあたちも今晚はキャマクラ泊まりよ」

と郷田が、呂律の回らない言葉で答える。

「あんたの鎌倉はキャバクラに聞こえるなあ」

「署長も酔っ払って耳がおかしくなったのね」

そのとき電話が来た。

竹田金之助からだった。

「よかった、無事なのねえ」

郷田は酔いが吹っ飛んだ。

「美々ちゃんも無事に保護しました。」

いまは事務所のソファで眠っていますよ」

相当の苦労があったのだろう、金之助の声は掠れていた。

「わかったわ、すぐに戻るわ。」

詳しい話はあとでよろしくね。

それから榊奈々さんにも迎えに来てもらいますから」

郷田は電話を切って、山風に報告した。

山風の方も酔いが吹っ飛んだらしい。

「よかった、よかった、とりあえずよかった」

「今晚はあたしが金之助さんの報告を聞きます。」

署長と小林さんには、明朝報告しますが、それでいいわね」

「そうしてくれ、そうしてくれ、とりあえず今夜は眠れる」

郷田は外に飛び出し、雨の中でタクシーを拾った。

タクシーの中で奈々に電話を入れた。

涙声の奈々もタクシーですぐに鵜沼に行くと言った。

十四日、午後十一時。

鵜沼の事務所に戻った郷田狂介は、竹田金之助を抱き締めている。

ふたりとも衣服は濡れているが、ソファで眠る美々は郷田のパジャマに着替えていた。

金之助は自分の着替えもせずに、美々を寝かせつけるのを優先したのだと郷田には解っていた。

だから自分の体温で温めてあげるつもりで、郷田がいつまで経っても放さないの  
で、金之助はようやく声をあげる。

「自分らもそろそろ着替えましょうや。

まだまだやることがあるから、風邪なんか引いてられません」

郷田は我に帰って、

「そうね、そうね、一緒にお風呂に入りましょうか」

そのとき、榊奈々が飛び込んで来た。

美々の姿を一目見るなり、抱き起こして泣きじゃくった。

眼がさめた美々も泣きじゃくった。

「美々ちゃんには怖い思いをさせちゃったわね。

今夜はママと一緒に寝るといいわ」

母娘に向って云った郷田は、奈々が停めておいたタクシーまでふたりを送った。

雨はあがっていたが道がひどく汚れていたの、郷田は美々の手を取って送った。

奈々は何度も頭を下げて、なかなかタクシーに乗り込まなかった。

「助けてくれたのはあたしではなく、竹田金之助という人ですよ。

その人の名を、決して忘れないでくださいな」

奈々は頷くと、美々と一緒に帰って行った。

戻ると、すでに金之助はシャワーと着替えを済ませていた。

郷田も着替えて、熱いコーヒーを入れた。

コーヒーをひとくち飲むと、金之助は自ら述懐し始める。

「企業秘密ですから詳しい手口はいえませんが、江ノ島のとっぺんと未来計画カンパニーの屋上をロープでつなぎ、それを伝って忍び込みました。

空調を壊して中に入ったのですが、防犯システムは半端ではなく大企業や大邸宅の十倍レベルでした。

あちこちの扉も普段なら三十秒で開けられるところを、やはり十倍かかりましたね。

泥棒どころか映画のスパイになった気分、殺人電流などを止めたりしてあちこち偵察しました。

十階はやはり迷路になっていましたが、第六感で部屋を決めて中に入ると、美々ちゃんがいきました。

べつだん拘束されている風はなくて、テレビゲームをやっていましたが、やはりどことなく窺われてはいました。

初対面の自分を見てやはり胡散臭いと感じたのでしょう、美々ちゃんは厭がったのですが、自分は美々ちゃんを強引に担いで階段を駆け降りました。

一階のロビーに出て玄関をこじ開けていますと、背中に無気味な殺気を感じました。

あれが荒野大三郎というのでしょうが、黄金仮面といったほうが自分にはピンと

きます。

格闘する構えをしていますと、黄金仮面はリモコンのスイッチを押しました。

何重にもなっている玄関の扉がひとつひとつ開き、黄金仮面は自分たちにそこから出るよう促しました。

自分が躊躇していると、黄金仮面いわく、美々ちゃんは拉致したのでも誘拐したのでもなく、本人がどうしてもここに来たいというので、タナカ君が渋々連れて来たとのこと。

家に帰るように諭したのだが厭だというので、そのうち飽きて引き上げるだろうと考えていたとも云っていました。

嘘か真かは解りませんが、自分が尋ねても美々ちゃんは否定しなかったのも、もしかすると黄金仮面の云うとおりかもしれません。

自分が美々ちゃんをおんぶして引き上げる時に、背中の方から黄金仮面が声をかけてきました。

何ヲヤルニセヨ、子供ハ、マキゾエナンカニシマセンノデ、ゴ心配ナク。

プファイ。

横殴りの雨だったので、江ノ島の橋を美々ちゃんをそのままおんぶして渡り、通りに出てからタクシーを拾ってここに帰ってきたというわけです。

自分の報告はこれで総てですが、未来計画カンパニーのあの防犯システムを思うと、やはり何か企んでいることは確実でしょう。

どちらにしても未来計画カンパニーの建物構造の大半は、頭の中にたたきこんであります」

「お疲れさまでした、報告聞いているだけでも、手に汗を握る感じですよ。

目的は美々ちゃんの救出と未来計画カンパニーの偵察ですから、完璧にやり遂げてくれました。

山風署長とお父上のほうには、明朝あたしから報告しておきますね」

郷田には目の前の金之助が、スーパーマンかバットマンかスパイダーマンに見えた。

十五日、午前八時。

郷田狂介は鵜沼の事務所にいる。

竹田金之助はまだ起きて来ない。

郷田は、朝食を作る前に、山風健一と小林金助にメールを入れた。

[竹田金之助さんのスーパー級の活躍／美々ちゃん無事保護し昨夜ママが連れて帰りました／未来計画カンパニーの建物内の偵察も済ませたとのこと／なお荒野いわく／タナカ君は拉致ではなく美々ちゃんの希望で未来計画カンパニーに行ったとのこと／それはそうなのかもしれないけれど／ただそれとこれとは別物と思



われます／もしご都合よければ本日午後一帰路で／金之助さん交えて／山風さん  
小林さんへ郷田より]

金之助が二階から降りて来た。

郷田は朝食を作り始めた。

野菜サンドと、スクランブルエッグと、鶏の空揚げと、オニオングラタンスープ  
と、デミタスコーヒー。

金之助が軽いストレッチを終えるのを見計らって、

「お待たせ、できましたよ」

「すいません、何から何まで」

金之助が恐縮すると、郷田は真剣な声で、

「これからが本番よ。

金之助さんには充分英気を養つといていただかないとねえ」

「自分もそのつもりですよ。

現代の鼠小僧なんて云われて、義賊のつもりでやってきたけど、助けられたのは  
ほんの一握り。

次の闘いは、大袈裟に云って、人類を助ける仕事になるかもしれません」

「じつはあたしもそう推測しているんだけど、それはあんがい大袈裟なことではな  
いかもしいわ。

金之助さんの報告を聞いて確信が芽生えたのよ」

「武者震いしますね」

「大丈夫かしら、風邪ひいたんじゃないの」

と云った郷田のほうが、武者震いをしていた。

十五日、午前十時。

小林金助は未来コスモス院でタナカと顔を突き合わせている。

朝食をのトレイを下げに来たタナカを引留めたのだった。

「タナカ君、美々ちゃんは、あちきの息子が未来計画カンパニーから連れ出したら  
しいぜ」

金助はもちろん、荒野が聞いていることを念頭に置いていた。

だから、助け出したとは云わなかったのだ。

「ソウデスカ、ソレハヨカッタデス。

美々チャンニハ、救助ガ必要ダッタカモシレマセン。

デナケレバ、アソコデー生ヲ、オエテイタカモ」

「あちきはタナカ君を疑っていたけど、美々ちゃんは家庭的な問題で苦しめられて  
いたのかねえ」

「ハイ、学校的ニモ問題ガアッタヨウデス」  
「もしかして美々ちゃんは、タナカ君の恋人ではなかったのかい」  
「ソナワケハナイデショウ、ワタシハ女デスヨ。  
ソノコトハ美々チャンモ、ワカッテイマシタ。  
相談ニノッテイタノデスガ、ソレガアンナコトニナッテシマッテ、責任ハカンジ  
テイマシタ」  
「へえ、ロボットも責任感じたりするのかい」  
「莫迦ニシテハイケマセン」  
「なあに、莫迦になんかしていないよ、感心しているのさ。  
一件落着で安心したから、あちきはこれから呑気に、散歩に出かけるぜ」  
この言葉ももちろん、荒野を油断させるためのものだ。  
「ソウデスカ、イッテラッシャイ。  
昼御飯ハ外デスネ、今晚ハ何ガタベタイデショウカ」  
「そうよなあ、昼はマクドナルド、いやケンタッキーだから、焼き魚なんかがいい  
なあ」  
小町通りにマクドナルドはあってもケンタッキーはないから、念のため云いなお  
したのだった。  
「了解シマシタ。  
鯖カ鱈カ鱈カ鰯カハ、ワタシニオマカセヲ。  
モットモ、小林サンハ、クサッテモ鯛デスカラ、鯛ニシマショウカ」  
「腐ってもは余計だが、タナカ君はお世辞も上手だな」  
久し振りに金助は、嬉しそうに笑った。  
金助にとって、荒野はどこまでも憎いが、タナカはやはり可愛いのであった。

十五日、午後十二時半。

喫茶店「帰路」で山風健一署長は、郷田狂介からの朝のメールをあらためて見て  
いる。

[竹田金之助さんスーパー級の活躍／美々ちゃん無事保護／昨夜ママが連れて帰  
りました／未来計画カンパニーの建物内の偵察も済ませたとのこと／なお荒野い  
わく／タナカ君は拉致ではなく美々ちゃんの希望で未来計画カンパニーに行った  
とのこと／それはそうなのかもしれないけれど／ただそれとこれとは別物と思わ  
れます／もしご都合よければ本日午後一／帰路で／金之助さん交えて／山風さん  
小林さんへ／郷田より]

立原正男が声をかける。  
「珍しく安堵と余裕の表情ですね」

「君は人の顔色も読めんのか」

と苦笑しつつ山風は応えたが、顔に出るようでは、まだ半人前だなと思った。

「署長の顔を見られるのは嬉しい限りですが、こんなに会議ばかりされていては、店はあがったりですよ」

立原は反撃したつもりだったが、立原が郷田狂介からたっぷり謝礼を貰っていることを山風は知っている。

「あがるのは、さがるよりも、いいだろう。

さて、そろそろ来るころかな」

山風は立って入口まで行った。

ちょうど郷田と竹田金之助がやって来たところだった。

「これはこれは、ようこそ竹田さん」

愛想良く山風が云うと、金之助は低頭して、

「このたびは自分に生き甲斐を与えてくださり感謝しております」

血は争えないと山風は感じた。

この低姿勢とそれに不釣り合いな鋭い眼光。

金之助は父金助にそっくりではないかと、感心すらしたのである。

「小林さんはまだですか」

と郷田が云うと、

「あそこに見えます」

と金之助が遠くを指さした。

いつもとは逆に鎌倉八幡宮方面から、朝の陽光を浴びつつ懸命に車椅子でやってくる、小林金助の姿があった。

着くなり金助は、照れ笑いしながら、

「ちょいと遠回りして、八幡宮にお参りしてきやした」 だれも何のためかなどと野暮な事は聞かなかった。

四人はテーブルを囲んだ。

金之助は昨夜眠らずに描いた、未来計画カンパニーのビルの内部の見取り図を広げた。

「地上十五階、地下五階、各々のフロアは迷路になっていて、それぞれ五つばかりの大部屋と十ばかりの小部屋があります。

一階から七階までは、荒野の部下たちが仕切るフロア、八階から十二階までは、ロボットたちのフロア、十三階から十五階までは、荒野のプライベートフロアになっているようです。

問題は地下の階のフロアで、今回は調べられませんでしたでしたが、地上の階のフロアの、さらに数十倍のセキュリティーと思われましたから、自分の推察では、あそこに荒野の未来計画を保証し、推進するナニモノカがあると思われま

山風は腕を組んだ。

郷田は溜息をついた。

金助は電話が来たのでスマホを取り出した。

相手は非通知設定だった。

こういうときは電話に出ない金助だったが、何か予感めいたものがして今回は出た。

「小林金助でやんすが」

「金ちゃん、ひさしぶりだね、元気そうで良かった」

人工声帯を使っているかのごとき声だったが、紛れも無く麻暮正作の声だ。

「だだだ、だんな、麻暮のだんな」

我知らず金助は車椅子から立ち上がっていた。

「ケケケ、ケッケ。

そう、ボクだよ、麻暮だよ。

さすがは金ちゃんだ、電話番号を変えていなかったんだねえ」

「へえ、もしかして、だんなから仕事の電話が入るかもしれないと、いつも思ったりやした」

「でも、いまの金ちゃんに仕事は頼めないやね。

息子さんの活躍は陰ながら拝見させて貰ったよ。

昔の金ちゃんを思い出したものさ」

「へえ、あちきの代りに、息子を使ってやってくださいませえ」

「それは有り難いね、大きな戦力になりそうだよ」

「他に探偵の郷田狂介さんが、参加したいと云ったりやす」

「それも有り難いね、郷田狂介さんなら、舟木英介さんの後輩だね。

探偵チャンピオン大会の準優勝者よ」

「へえ、さすがにだんなは詳しいですね」

「ケケッ。

ボクはその大会の審査委員長だったのよ。

尤も誰々が審査委員かは伏せられていたんだがね。

木場完蔵という凄腕が、探偵が探偵チャンピオンになったんだけど、ボクに云わせれば郷田さんが譲ったんだな」

「へえ、本人は探偵チャンピオンを、木場さんに譲ったなんて云いませんがね。

とにかく頼りになる人でやんす。

ところで、だんなはいまどちらで」

「ケケケ、ケッケ。

信じられんだろうが、海底よ。

未来計画カンパニーを、いや荒野大三郎を探っていたら、海底に辿り着いたのさ。

ここに、荒野の途方もない計画の一端が垣間見られる」

「へえ、それで、麻暮のだんな、いつ決行いたしやすか」

「今月二十日だよ、何かと支度もあるから五日後で。

金ちゃんの息子さんと郷田さんは、当日正午に、江ノ島の橋のたもとにある釣具屋玄治に来てくれれば、そこで段取りを打ち合わせできる」

「二十日、正午でやんすね、釣具屋玄治でやんすね」

「そうだよ、よろしくね。

金ちゃんとは、ボクが生還すれば、また会えるよ」

「不死身のだんなが、何をおっしゃる」

「それじゃ、みなさんによろしく」

麻暮正作は電話を切った。

金助は涙に濡れた顔でみんなを見回した。

「了解よ、了解」

郷田が感極まって叫び、金之助が何度も頷き、山風は烈しく手を叩いた。